

【ディスカッションペーパー】

19世紀前半の楽譜出版と

Beethoven の楽譜の価格プレミアムに関する研究

——C. F. Whistling の印刷楽譜のカタログ分析を通じて——

奈良沙織

明治大学 商学部

2025年2月

内容

1. はじめに.....	4
2. Whistling の印刷楽譜のカタログと分析手法.....	5
2.1. Whistling の印刷楽譜のカタログ.....	5
2.2. 第 2 版の概要.....	6
2.3. 分析手法.....	7
2.4. データの概要.....	8
3. 分析結果.....	10
3.1. 地域別出版状況についての分析結果.....	10
3.1.1. 地域ごとの印刷楽譜の出版概況.....	10
3.1.2. シンフォニー.....	11
3.1.3. ピアノ曲.....	11
3.1.4. 弦楽四重奏曲.....	12
3.2. 出版社別出版状況についての分析結果.....	13
3.2.1. 主要な出版社の概況.....	13
3.2.2. シンフォニー.....	14
3.2.3. ピアノ曲.....	15
3.2.4. 弦楽四重奏曲.....	15
3.3. 作曲家別出版状況についての分析結果.....	16
3.3.1. 主要な作曲家による出版の概況.....	16
3.3.2. シンフォニー.....	16
3.3.3. ピアノ曲.....	17
3.3.4. 弦楽四重奏曲.....	18
4. 楽譜の出版価格についての分析.....	21
4.1. データに収録されている通貨に関する説明.....	21
4.2. 通貨別の価格の分析結果.....	22
4.2.1. シンフォニー.....	22
4.2.2. ピアノ曲.....	23
4.2.3. 弦楽四重奏曲.....	23
4.3. Beethoven とそれ以外の作曲家の出版譜の価格の分析.....	25
4.3.1. 追加分析の概要.....	25
4.3.2. シンフォニー.....	25
4.3.3. ピアノ曲.....	25
4.3.4. 弦楽四重奏曲.....	26
5. おわりに.....	29

凡例

作曲家や出版社、出版地域の表記は、原則として C. F. Whistling の印刷楽譜のカタログに記載された表記に基づきアルファベットで記す。そのため例えば、ミラノはドイツ語で Mailand と表記している。西欧の人名に関しては、初出時にカタカナで表記した上で、原語表記と生没年を示す。また、地名に関しては、当時の国名と現在と国名が異なる場合もあるが、現在の国名に基づいてカタカナで表記する。

要旨

本稿は、C. F. Whistling による 19 世紀の印刷楽譜のカタログを俎上に載せ、シンフォニーとピアノ曲、弦楽四重奏曲のカテゴリーの分析を通して、19 世紀前半の楽譜出版について主要な作曲家や出版社の状況、出版地域や出版価格について明らかにした。さらに、1827 年に死去した Beethoven について、楽譜出版の点からその当時の位置づけを検討した。

分析の結果、シンフォニーのジャンルにおいて、Beethoven の楽譜は他の作曲家よりも高額で販売されていたことがわかった。また、当時最も楽譜出版の多かった作曲家は、ピアノ曲が Beethoven、シンフォニーと弦楽四重奏曲が Haydn であり、出版地域に関してはどのジャンルも Paris での出版が最も多いことが明らかになった。さらに、出版価格については、シンフォニーの値段が最も高く (2.00 ターラー)、次いで弦楽四重奏曲 (1.13 ターラー)、ピアノ曲 (0.53 ターラー) となっていることもわかった (1 ターラー = 1 万円程度とすると、シンフォニーは 2 万円程度、弦楽四重奏曲は 1 万円強、ピアノ曲が 5,000 円強)。

本稿の貢献としては、これまで十分に研究が行われてこなかった Whistling のカタログについて特に価格の情報に着目して分析を行った点、Beethoven の楽譜が他の作曲家よりも高い価格で販売されていたことを明らかにした点、OCR 処理によりカタログにある大量の情報をデータベース化しそれを分析するという従来音楽学ではあまり行われてこなかった分析を試みた点を挙げる。

1. はじめに

本稿は、カール・フリードリヒ・ヴィストリング Carl Friedrich Whistling (1788-1849)¹ が 1828 年に出版した印刷楽譜のカタログを俎上に載せ、シンフォニーとピアノ曲、弦楽四重奏曲²のジャンルの分析を通して、19 世紀前半の楽譜出版の状況について明らかにする。さらに、1827 年に死去したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) について、死去した頃の受容の程度を知る手がかりとして、印刷楽譜の出版という観点からその位置づけを考察する。

Whistling のカタログは、19 世紀にヨーロッパ地域で流通していた様々な作曲家や出版社の印刷楽譜をジャンル別に整理したものである。Duckles (1967, 504)によれば、こうした大規模な印刷楽譜のカタログが出版されるようになったのは 19 世紀初頭であり、Whistling によるカタログが最初のそれにあたる。大崎 (2018, 第 1 部, 151)は、この印刷楽譜のカタログの登場により同業者の刊行物が一目瞭然となり、ヨーロッパの楽譜出版界に大きな変革をもたらされたと述べている。

詳細については後述するが、Whistling のカタログの初版は 1817 年に出版され、本稿で分析した第 2 版は 1828 年に出版されている。本稿で第 2 版を取り上げたのは Beethoven の晩年における彼の印刷楽譜の出版状況を把握するためであり、1828 年は Beethoven が死去した年 (1827 年) の翌年にあたる。カタログにはドイツ・オーストリア・フランスを中心とした地域の印刷楽譜について、ジャンル別に作曲家・曲名・出版地域・出版社・価格の情報が収録されている。第 2 版に関しては 1,000 ページを超えるボリュームがあることから、その全体像を把握することは容易ではなく、その内容については十分な研究が行われてこなかった。

しかし、現代ではコンピューターの技術の向上により、カタログの情報を OCR 処理により文字情報に変換し、エクセルでデータベースを構築することでその全体像を把握することが可能になった。そこで、本稿はこうした手法を用いて印刷楽譜のカタログの情報を分析し、Whistling のカタログが公開された当時の楽譜出版の状況および当時の Beethoven の印刷楽譜の位置づけについて明らかにする。

以下では、第 2 章で本稿の分析に用いた Whistling のカタログの概要と分析手法について説明する。第 3 章では、「作曲家」「出版社」「出版地域」の分析結果を示し、第 4 章では「楽譜の価格」について分析結果を示す。その上で、第 5 章で本稿のまとめについて述べる³。

¹ 以下、Whistling。本稿では、他に息子の Friedrich Wilhelm と August Theodor が同じ Whistling 姓であるが、単に Whistling としたときは C. F. Whistling を指す。

² Whistling の出版カタログでは「ヴァイオリンのための四重奏曲」と表記されているが、本稿では現代の通称である「弦楽四重奏曲」という言葉を用いる。

³ タイトルにある価格プレミアムは、同じカテゴリーの商品・ブランドよりも販売価格が高く設定されていたとしても、消費者に需要されることを意味し、商品の価格のうちブランド価値として上乗せされている部分を指す。

2. Whistling の印刷楽譜のカタログと分析手法

2.1. Whistling の印刷楽譜のカタログ

Whistling はドイツの音楽出版者であり、ライプツィヒで文献学と官房学を勉強したのち、楽譜出版社の Hoffmeister や Kühnel、Peters で働くなかで、印刷楽譜のカタログの編纂に携わることになる。Whistling が編纂に携わった「1815 年までに印刷された音楽文献のハンドブック⁴」は、Anton Meysel により 1817 年に出版された。1817 年に公表したカタログが成功したため、Whistling は Meysel のもとで 1818 年に補遺の第 1 巻を出版する。この動きに関心を示したのが、同じく Leipzig で音楽出版社を経営していたフリードリヒ・ホフマイスター Friedrich Hoffmeister (1782-1864) であり、補遺の第 2 巻 (1819 年に出版) から第 8 巻 (1825 年に出版) までの出版は彼によって出版が行われている。

この間、Whistling は Meysel から楽器店を買収し、楽器店の経営のために 1821 年に音楽出版社を退社していた。しかし、音楽愛好層の興味が衰退して Hoffmeister がこの事業から撤退したことで、Whistling がこのカタログの出版を再び手掛けることになる。これ以降、1826 年と 1827 年に補遺の第 9 巻と第 10 巻が出版され、1817 年の初版と 1818 年から 1827 年までに出版された補遺をまとめて、1828 年に第 2 版⁵が出版された。このときの印刷楽譜のカタログが本稿で分析する資料である。

第 2 版に関しては、翌年の 1829 年に Whistling により補遺が出版されている。その後、1829 年の 1 月から 1830 年の 6 月まで月次でカタログが更新されるが、1830 年に Hoffmeister が Whistling の楽器店と出版カタログ事業を買収したことで、1831 年から 1842 年は Hoffmeister より月次でカタログが出版されている⁶。第 2 版の補遺の第 2 巻は 1834 年に、補遺の第 3 巻は 1839 年に出版され、これらをまとめた第 3 版は Hoffmeister により 1844 年から 1845 年にかけて出版された。この後も、1852 年に第 4 版、1860 年に第 5 版が出版されるなど、最終的には 1943 年まで 100 年以上に渡り出版カタログの更新は続いた。なお、第 2 版以降は、Whistling の長男のフリードリヒ・ヴィルヘルム Friedrich Wilhelm (1809-1861) や、次男のアウグスト・テオドル August Theodor (1812- 1869) も編集に携わっている⁷。

⁴ 表紙には以下の通り記載されている。Handbuch der musikalischen Litteratur oder allgemeines systematisch geordnetes Verzeichnis der bis zum Ende des Jahres 1815 gedruckten Musikalien, auch musikalischen Schriften und Abbildungen mit Anzeige der Verleger und Preise.

⁵ Whistling の印刷楽譜のカタログは新しい版が出るたびに表紙に記載される文言が変化しており、第 2 版では以下の通り記載がある。Handbuch der musikalischen Literatur oder allgemeines systematisch geordnetes Verzeichnis gedruckter Musikalien, auch musikalischer Schriften und Abbildungen mit Anzeige der Verleger und Preise, herausgegeben von C. F. Whistllig.

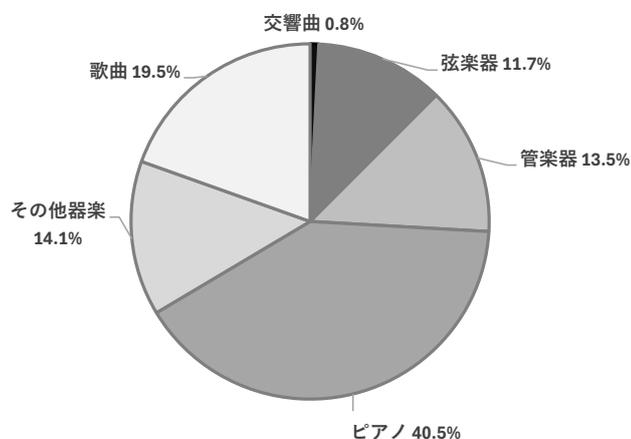
⁶ Whistling はその後、Hamburg や Wien で音楽店を営み、長男の Friedrich は 1835 年に Leipzig に音楽出版社を設立し、Schumann の主要な作品などを出版している。また、次男の August は、C. F. Peters の幹部社員として働いていた記録がある。

⁷ 以上の出典は、Elvers and Hopkinson (1972)、Krohn (1919)、Krummel (2001)、Beer (2007) である。

2.2. 第2版の概要

第2版の総ページ数は1,158ページに及び、図表1に示すように、約8割が器楽曲、残りの約2割が声楽曲となっている。器楽曲の約半分はピアノ曲（約470ページ、40.5%）であり、残りはシンフォニー、ヴァイオリン、管楽器の曲などである。ピアノ曲以外の器楽曲では、ヴァイオリンやフルートの曲が100ページ前後と多い。後述するように、Whistlingのカタログが当時流通していた印刷楽譜のどれほどをカバーしていたかについては定かではない部分もあるが、カタログは1828年ごろの出版譜をカバーしていることから当時の市場の状況を反映していると考えられる。

図表1 第2版の内訳



カタログには、作品ジャンル別に作曲家名、曲名、出版地域、出版社、価格の情報が記載されている。作曲家についてみると、Beethovenやウォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)のような著名な作曲家だけではなく、現在では著名でない作曲家も含まれる。出版社については、Breitkopf & Härtel社のように現代にまで残る楽譜出版社もあれば、そうでない楽譜出版社もある。出版地域はフランス・ドイツ・オーストリア地域が中心で、ピアノ曲や弦楽四重奏曲などはイタリア・オランダ地域の出版社も含まれている⁸。一方、イギリスの出版社はカバーされておらず、言語についてはドイツ語とフランス語で表記されている。

他の楽譜のカタログとしては、HofmeisterやBreitkopfなどの出版社による自社が販売する楽譜のカタログなどがある。このうち、Breitkopfの出版カタログは、大崎(1993b, 40-43)によると、1762年から1787年の25年間にわたり作成されており、正巻6、補巻16の合計22巻からなり、ページ数は888ページとなっている。作品数は約1500曲、作曲者は1000人を超えるが、ヨーゼフ・ハイドン Joseph Haydn (1732-1809)とMozartは足しても

⁸ 出版社がビジネスを行っていた国名は現在の版図に基づく。

全体の 3-4%しかない。このカタログは楽譜の冒頭(インシピット)が掲載されるとともに、作曲家名、作品名、楽器編成などが記載されている。Breitkopf はこのカタログを印刷して大量に配布し、注文を取って抱えていたコピストに筆写させ、筆写楽譜を販売していた⁹。

また、20 世紀の研究者が過去の出版社の目録を再構成したカタログとして、Artaria 社の出版目録¹⁰などもある。しかし、こうした特定の出版社のカタログでは、その出版社の出版状況は明らかになるものの、当時の印刷楽譜の市場全体を明らかにすることはできない。そもそも、これらはいくまでも再構成されたカタログであり、同時代の需要を反映して作成されたものではない。その点、Whistling のカタログは様々な出版社の楽譜が掲載されており、当時の楽譜出版の全体像を明らかにする上で有益である。さらに、Whistling のカタログには価格が記載されており、楽譜がいくらかで販売されていたか、どのような作曲家やジャンルの楽譜が高額で販売されていたかなどについても知る事ができる¹¹。

一方、Whistling のカタログの弱点としては、当時の印刷楽譜のどれくらいをカバーしていたのかについては明らかでない点が挙げられる。加えて、今日では無名となった作曲家の楽曲も含まれており、詳細を知ろうと試みても分からないことが多い。さらに、価格に関しては複数の通貨が用いられているのでその換算が課題となることもある。こうした問題点はあるものの、Whistling のカタログは、他のカタログにはない情報を含んでおり、当時の印刷楽譜の出版状況を知る上での重要な手がかりとなることから分析を試みる。

2.3. 分析手法

図表 2 は、Whistling のカタログからの抜粋であり、シンフォニーのカテゴリーの冒頭部分である。資料は PDF ファイルで入手したが、PDF では文字情報が画像データとして認識されていることから、はじめに OCR 処理により文字データに変換する¹²。この際、誤変換などのエラーは目視で確認の上、可能な範囲で修正を行う。

その上で、カタログでは 1 件のデータとして記載されているが実際は複数曲となっているものについて、複数曲に分割する。例えば、“Haydn (J.) Sinfonie périodique. No. 1-53. Paris, Sieber á 6 Fr.” は、実際は 53 曲あり、それぞれが 6 フランの価格が付いているので 53 件分のデータとする。このようにして修正が済んだデータを「作曲家」、「曲名」、「出版地域」、「出版社」、「価格」に分割し、表記揺れを調整した上で¹³データベースを完成させる。

⁹ この出版カタログでは、後になるに従って Paris や Amsterdam, Berlin, Offenbach, London などの地域で楽譜が増えており、こうした地域で印刷楽譜の出版が拡大していたことも確認されている。

¹⁰ Vollständiges Verlagsverzeichnis Artaria & Comp. Alexander Weinmann 編。

¹¹ 他に価格の情報が得られるものとしては、Paris の『音楽年鑑 Almanach musical 1775-79, 1781-83』があり、ここでは前年に出版された楽譜についてジャンルごとに記載されている(大崎 1993a)。

¹² OCR 処理には Wondershare PDFelement を利用した。他に OCR 処理ができるソフトとしては Adobe Acrobat がある。

¹³ 例えば、Leipzig, Leip.などは Leipzig に統一している。

図表2 Whistling のシンフォニーのカテゴリーに記載されている情報

Instrumentalmusik.

Aa. Sinfonien, Fantasien, Entr'Actes, Märsche und andere Stücke für das Orchester.

- Abel, 6 Sinfonies à 8 Parties. Oe. 4. Leipz. Br. et Härtel 1 Thlr. 8 Gr.**
Amon (J.) Sinfonie à 14 Parties. Oe. 1 in B. Bonn, Simrock 6 Fr.
— Sinfonie. Oe. 60, in Es. Mainz, Bött 5 Fl. 20 Xr.
André (J. A.) Sinfonie. Oe. 4, in C. Offenbach, André 2 Fl.
— do. Oe. 5, in F. Oe. 6, in G. Ebend. à 2 Fl.
— grosse Sinfonie zur Friedensfeier. Op. 7, in D. Ebend. 2 Fl. 30 Xr.
— Sinfonie facile. Oe. 11, No. 1, in D. No. 2, in B. Ebend. à 2 Fl.
— Sinfonie. Oe. 13, in G. Ebend. 3 Fl. 30 Xr.
— do. Oe. 25, in Es. Nouvelle Edition. Ebend. 4 Fl. 30 Xr.
— do. Op. 41, in D. Ebend. 7 Fl. 80 Xr.
Bach (C. P. E.) 4 Sinf. mit 12 oblig. Stimmen. Leipz. Schwickert 3 Thlr.

出典：Whistling (1828)

このデータベースをもとに、はじめに作曲家、出版社、出版地域ごとの出版件数を示すことで19世紀の楽譜出版の状況を俯瞰する。加えて、作曲家と出版社、出版社と地域、作曲家と地域からなるクロス集計表を用いた分析を行う。クロス集計表を用いた分析では「作曲家と出版社」のように2つの質的変数の関係を分析することで、前述の作曲家・出版社・出版地域の分析結果についてより詳細な情報を得ることができる。具体的には、Beethovenの作品がどの地域でどれくらい出版されているか、Parisではどの作曲家の出版が多かったかなどを明らかにすることが可能である。なお、紙幅の関係上、結果に関しては出版地域・出版社・作曲家は上位10件について示し、クロス集計表に関しては図表を示さず文章中で結果について述べる。その上で、価格について分析する。なお、価格の分析方法に関しては第4章で説明する。

2.4. データの概要

本稿では、シンフォニー、ピアノ曲、弦楽四重奏曲の3つのカテゴリーについて分析を行う。カタログではオーケストラのための曲が1~30ページにあり、さらにシンフォニー、序曲、舞曲などに分かれている。分析の対象としたシンフォニーのカテゴリー¹⁴は、1~9ページに記載されており、ページ数は9ページである。データの件数は715件であるが、分

¹⁴ 具体的には、Aa (Sinfonien, Fantasien etc. für das Orchestre)のカテゴリーである。なお、綴りは資料の通りに記載している。

析に必要な情報（作曲家名・出版地域・出版社・価格）があるものに限定すると 712 件となる¹⁵。

ピアノに関する曲は 425～893 ページにあり、約 470 ページを占める。このカテゴリーはさらに協奏曲や二重奏曲、三重奏曲、四重奏曲などに分類され、ページ数としてはロンドや変奏曲、舞曲などが多い。Beethoven の作品が多いカテゴリーは、4 手ピアノのためのソナタやピアノ単独で演奏されるソナタのカテゴリーであるが、4 手ピアノのためのソナタの多くは編曲であることから、ここではオリジナルに近い楽譜を多く含むピアノ単独で演奏されるソナタのカテゴリー¹⁶に着目し分析を行う。このカテゴリーは、577～606 ページに記載されており、ページ数では 30 ページとシンフォニーの 3 倍以上ある。データの件数は 2,350 件であるが、ここから分析に必要な情報がないデータ 16 件¹⁷を除外し、2,334 件を分析の対象とする。

弦楽器のうちヴァイオリンに関する曲は 51～167 ページに記載されており、120 ページ弱とピアノに関する曲に次ぐ規模である。このカテゴリーはさらに、ヴァイオリン・コンチェルト、ヴァイオリン・ソロ、二重奏曲、三重奏曲、四重奏曲、五重奏曲などに分かれ、ページ数では二重奏曲が 50 ページ強とヴァイオリンのカテゴリーの半数弱を占める。次に多いのが四重奏曲の 30 ページ弱で、シンフォニーとピアノ以外で Beethoven の曲が多いのもこのカテゴリーである¹⁸。こうした理由から、ヴァイオリンに関する作品の中でも四重奏曲を分析の対象として選択した。このカテゴリー¹⁹は 72～99 ページに掲載されており、ページ数では 27 ページある。データを整理した結果、2,053 件のデータがあった。このうち、分析に必要なデータがないものを除外した 2,041 件のデータについて分析を行う²⁰。

以上をまとめると、分析に用いたデータはシンフォニーの 712 件、ピアノ曲の 2,334 件、弦楽四重奏曲の 2,041 件の合計 5,087 件である。

¹⁵ 除外した 3 件は、「Ac を参照」といった他の項目を参照するように指示する記述である。

¹⁶ 具体的には、Qi (Sonaten und andere Stücke in deren Form (arrangirte Concerte, Sinfonien etc.) für das Pianoforte allein) のカテゴリーである。

¹⁷ 除外した 16 件は、出版社や作曲家、価格が不明もしくは欠損しているもの、その他のカテゴリーを参照するように指示する記述などである。

¹⁸ これ以外ではコンチェルト、三重奏曲、五重奏曲が 10 ページ前後となっている。

¹⁹ 具体的には、Cd (Quartetten für die Violine) のカテゴリーである。

²⁰ 除外した 12 件は、出版社や作曲家、価格が不明もしくは欠損しているもの、その他のカテゴリーを参照するように指示する記述などである。

3. 分析結果

3.1. 地域別出版状況についての分析結果

3.1.1. 地域ごとの印刷楽譜の出版概況

地域に関しては、シンフォニー・ピアノ曲・弦楽四重奏曲のすべてのカテゴリーにおいて Paris での出版が最も多くなっている。Paris は 18 世紀にはヨーロッパ大陸最大の都市となっており、楽譜販売においても他地域よりも早い段階から写譜販売から楽譜印刷へと移行した。さらに、Paris では 18 世紀に彫版印刷が普及した際に作曲家自身が版元となるなど自家出版が多く、零細企業が乱立する状況にあった（大崎 1993b, 34-35）。こうした状況は Whistling のカタログでも確認でき、Pleyel、Sieber、Nadernann、Janet et C.などの大手出版社のほか、出版件数が少ない出版社も多くあり、他地域に比較して圧倒的に出版社の数が多くなっている。

オーストリア地域に関しては Wien の出版社が中心である。Wien では、大量の楽譜印刷を利用する層の形成や大都市の形成が遅れたため印刷楽譜の出版に関しては後発であった。18 世紀中ごろまでは筆写譜販売が主流であったが、1770 年代に入り印刷楽譜の需要が増え始める。Paris ほどではないが Haslinger や Artaria et C.、Cappi et C.など複数の楽譜出版社が存在している。

ドイツ地域に関しては、都市への人口集中が遅れていたことに加え、18 世紀中は彫版印刷が浸透しなかったこともあり、印刷楽譜が出回るようになったのは 19 世紀に活字印刷が浸透してからである。Paris のような大都市はなく、小規模な都市が点在しており、各地域で 1~2 社の出版社が存在するという大手の寡占の状況にあった。具体的な地域と出版社としては、Offenbach の André、Berlin の Lischke と Schlesinger、Bonn の Simrock、Hamburg の Cranz と Böhme、Leipzig の Breitkopf & Härtel と Perters、Hoffmeister などが挙げられる。

なお、大崎（1993b, 80）によれば、18 世紀において出版社の販売先は出版社の販売網がある地域に限定されていたため、作曲家はそれ以外の地域の出版社に対して同時に楽譜を販売することが可能であった。実際、Haydn や Beethoven は複数の出版社から作品を同時出版している。一方で、作曲家側はある地域で作品が出版されるとその海賊版が他域外で出版されるという問題を抱えていた。こうした事態を避けるため、作曲家は複数地域で同時に出版を行うことで海賊版が出回ることを防いでいたのである。例えば Beethoven についてみると、1816 年に出版したシンフォニー第 7 番と弦楽四重奏曲第 11 番、1817 年出版のシンフォニー第 8 番で、シュタイナー社が主導してドイツの 8 社と周辺の 9 地域で同時出版が行われている（大崎 2018, 第 1 部, 134）。

図表 3 は、地域別の出版状況について示している。以下では、カテゴリー別に分析結果について述べる。なお、カタログに表示されている出版地域に関しては、実際の販売地域なのか出版社が存在している地域なのか定かではないが、恐らく後者と推察される。

3.1.2. シンフォニー

シンフォニーでは18の地域から楽譜が出版されている。図表3のシンフォニーの結果を見ると、最も出版が多いのはParisの257件(シンフォニー全体の36.1%)であり、Offenbachの209件(29.4%)とParisの合計で65%を占める。さらにWien、Leipzig、Bonnも入ると92%を超え、この5地域がシンフォニーの楽譜の主要市場であったことがわかる。Parisでは1725年にコンセール・スピリチュエルが創設されているが、大崎(1993b, 63)によれば、18世紀後半になると公開演奏会はLondonやLeipzig、Wien、Berlinなどでも活発になる。また、ウェーバー(1983)は、1815~1845年は演奏会が爆発的に増加した時期で、その中心はLondon、Paris、Wienであったと述べている。演奏を聴きに来る層は自らも演奏することもあると考えられ、ParisやWienで印刷楽譜の出版が進んだ背景には、こうした市民によって都市における音楽の受容が増えたことも大きく影響していると考えられる。

地域と出版社の関係では、出版の盛んなParisでは多くの出版社(11社)がシンフォニーの楽譜の出版を行っていたが、多くの楽譜を扱う出版社は一部に限られ、数件の取り扱いに限られる小規模な出版社が多い。

地域と作曲家の関係をみると、Parisの出版社からは、27名の作曲家の楽譜が出版されている。最も多いのがHaydnの143件であり、次いでイニャース・ジョセフ・プレイエル Ignaz Josef Pleyel (1757-1831)の32件である。次に出版件数が多いOffenbachでは40の作曲家の楽譜が出版されており、最も多いのがHaydnの33件、次がPleyelの25件である。Parisと比べるとHaydnに集中しておらず作曲家が分散する傾向がある。

3.1.3. ピアノ曲

シンフォニーの楽譜が18地域で出版が行われていたのに対して、ピアノ曲の出版は32地域に及び、イタリアやオランダの出版社も掲載されている。図表3でピアノ曲の分析結果をみると、最も出版件数が多い地域はシンフォニー同様Parisであり、665件とピアノ曲全体の28.5%を占めている。次いでLeipzig(478件、20.5%)、Wien(385件、16.5%)、Berlin(157件、6.7%)、Hamburg(137件、5.9%)と続く。ピアノ曲の場合、シンフォニーではそれほど出版件数が多くなかったBerlinやHamburgでの出版も多い。

地域と出版社の関係では、出版の中心となっているParisには39社の出版社が存在する。次いで多いのは、Leipzigの13社、Wienの12社、Berlinの11社であり、出版数の多い主要都市では出版社の数も多くなっている。また、Parisに対してLeipzigでは出版社数は少なく、Breitkopf & Härtel、Peters、Hofmeisterといった規模の大きな出版社が8割以上のシェアを占める。

地域と作曲家の関係をみると、Parisの出版社からは、102名の作曲家の楽譜が出版されている。最も多いのがムツィオ・クレメンティ Muzio Clementi (1752-1832)の81件であり、次いでBeethovenの63件、ヨハン・バプティスト・クラマー Johann Baptist Cramer

(1771-1858)の 61 件となっている。また、Leipzig では Mozart が 31 件、Cramer (J.B.)が 29 件、Steibelt が 27 件と、地域により扱われる作曲家が多少異なることもわかる。

3.1.4. 弦楽四重奏曲

弦楽四重奏曲では、24 の地域で出版が行われている。図表 3 の弦楽四重奏曲の結果をみると、他のカテゴリー同様、Paris での出版が 788 件（弦楽四重奏曲全体の 38.6%）と多い。次いで、Wien の 444 件（21.8%）、Leipzig の 245 件（12.0%）、Offenbach の 236 件（11.6%）、Bonn の 98 件（4.8%）となっており、これらはシンフォニーの地域と重複する。

地域と出版社の関係では、Paris では 38 の出版社が楽譜を販売しているが、なかでも Pleyel の 134 件、Janet et C.²¹の 110 件が多い。次に出版数の多い Wien では 13 の出版社が出版を行っているが、内訳を確認すると Haslinger の 106 件と Weigl の 77 件の 2 社に集中している。Paris では市場が大きく、多くの出版社がしのぎを削っているのに対し、Wien では出版社は少なく、一部の大手出版社の高いシェアを占めるなど、市場の特徴は大きく異なる。

地域と作曲家の関係をみると、Paris では、174 名の作曲家の楽譜が出版されている。最も多いのが Haydn の 84 件であり、次いで Pleyel の 40 件、Mozart の 32 件となっている。一方、Wien ではジョアキーノ・ロッシーニ Gioachino Rossini (1792-1868) が 41 件、Haydn が 37 件、Mozart が 25 件となっている。Rossini は 89 件のうち、約半数にあたる 41 件が Wien の出版社となっているが、これは Wien を拠点とする Weigl や Haslinger からの出版が多いためである²²。

図表 3 地域別出版状況

シンフォニー			ピアノ曲			弦楽四重奏曲		
出版地域	件数	構成比	出版地域	件数	比率	出版地域	件数	構成比
1 Paris	257	36.1%	1 Paris	665	28.5%	1 Paris	788	38.6%
2 Offenbach	209	29.4%	2 Leipzig	478	20.5%	2 Wien	444	21.8%
3 Leipzig	87	12.2%	3 Wien	385	16.5%	3 Leipzig	245	12.0%
4 Bonn	56	7.9%	4 Berlin	157	6.7%	4 Offenbach	236	11.6%
5 Wien	50	7.0%	5 Hamburg	137	5.9%	5 Bonn	98	4.8%
6 Mainz	13	1.8%	6 Offenbach	125	5.4%	6 Mainz	61	3.0%
7 Augsburg	11	1.5%	7 Bonn	123	5.3%	7 Mailand	51	2.5%
8 Hamburg	10	1.4%	8 Mainz	60	2.6%	8 Augsburg	25	1.2%
9 Braunschweig	6	0.8%	9 Mailand	37	1.6%	9 Braunschweig	19	0.9%
10 Berlin	4	0.6%	10 Braunschweig	26	1.1%	10 Berlin	17	0.8%

²¹ Whistling の出版カタログでは Janet et C.と表記されているが、C. は Cotelle の略であると考えられる。

²² 第 3 章第 3 節の作曲家別出版状況についての分析結果述べるように、Rossini の大半は編曲譜である。

3.2. 出版社別出版状況についての分析結果

3.2.1. 主要な出版社の概況

分析を行ったシンフォニー・ピアノ曲・弦楽四重奏曲において、最も多くの出版を行っていた楽譜出版社はドイツの Offenbach に拠点を置く André である。André は、作曲家であり音楽出版者であったヨハン・アンドレ Johann André (1741-1799) が設立した音楽出版社である。シンフォニーと弦楽四重奏曲において出版件数がトップであり、ピアノ曲でも出版件数は 2 番目に出版件数が多く、3 つのジャンルで多くの出版を行っている。

次に取り扱い楽譜の多いのは Breitkopf & Härtel である。ドイツの Leipzig に本拠を置き、1719 年にベルンハルト・クリストフ・ブライトコプフ Bernhard Christoph Breitkopf (1695-1777) により創業された。現存する楽譜出版社の中で最も長い歴史を持ち、Haydn や Beethoven などの作曲家と同時代に存在していたことから、こうした作曲家の楽譜をリアルタイムで出版している。ピアノ曲で楽譜出版件数が最多であるのに対し、シンフォニーと弦楽四重奏曲では出版件数が 4 番目となっており、19 世紀前半ではピアノ曲に強みがあったようである。

3 番目に取り扱い件数が多かったのは Paris の Sieber である。音楽家であり音楽出版者であったジャン・ジョルジュ・シベール Jean-Georges Sieber (1738-1822) により設立された。シンフォニーと弦楽四重奏曲の出版件数が多いが、ピアノ曲の出版件数では 7 番目となっている。

Beethoven についてみると、Beethoven の作品を出版した出版社は時期によって大きく異なる。幼少期を過ごした Bonn から Wien に移住してからは、Bonn の宮廷楽団の同僚でホルン奏者であったニコラウス・ジムロック Nikolaus Simrock (1751-1832) が興した Simrock から出版が行われている。1793 年ころからは Wien の Artaria から出版するようになり、その後は Artaria の分裂により独立した Cappi と Mollo にも作品を提供している²³。このほか、Wien においては Eder、Hofmeister から出版を行った記録がある。

1800 年代に入ると Leipzig の Breitkopf & Härtel、Offenbach の André などとの取引が始まる。このうち Breitkopf & Härtel とは 1815 年までやり取りが続き、その間の書簡が 100 通以上存在する。Breitkopf & Härtel との契約状況が悪化した際は一時的に Wien のビューロー・デ・ザール・エ・ダンデュストリー Bureau des Arts et d'Industrie (美術工芸社) から出版が行われている。同社は Beethoven 中期の傑作作品をほぼ入手した重要な出版社であったが、1809 年に業務縮小に転じると、Breitkopf & Härtel との取引が再開される。1806 年以降は、Clementi、Steiner、Birchall、Schlesinger、Cappi & Diabelli、Peters、Probst、Schott などから出版が行われる²⁴。

²³ 1802～1803 年にかけて Artaria が Beethoven の許可なく弦楽五重奏曲 (Op.29) を出版したことをめぐって Beethoven が Artaria を訴えることになり関係は一時悪化するが、1805 年には和解し、1810 年以降は出版が再開される。また、Mollo とは 1801 年に出版した 6 つの弦楽四重奏曲 (Op. 18) が誤植だらけだったことから、1803 年に関係は終了している。

²⁴ 以上の Beethoven の出版に関する出典は大崎 (2018, 第 1 部, 108-152)。

出版社とのやり取りにおいて、Beethovenは無断で作品を出版されたり、出版された楽譜が誤植だらけであったり、出版社の経営状態が悪化したりと、出版時のトラブル等で出版社との関係が消失することは少なくない。また、Beethoven側も締め切りまでに作品を完成できなかつたり、契約とは異なる作品を出版社に送りつけたり、金額で折り合わなかつたりといったことで、出版社側が出版をあきらめたことも多かつたようである²⁵。

図表 4 は出版社別の出版件数をカテゴリー別に示したものである。以下では、このカテゴリーに従って分析結果について述べる。

3.2.2. シンフォニー

シンフォニーには全部で 42 社の出版社がカタログに記載されている。図表 4 より、最もシンフォニーの楽譜の取り扱いが多いのは Offenbach で出版を行っている André で 209 件（シンフォニー全体の 29.4%）であった。次は Paris の Sieber の 110 件（15.4%）、同じく Paris の Janet et C. の 84 件（11.8%）、Leipzig の Breitkopf & Härtel の 56 件（7.9%）、Bonn の Simrock の 52 件（7.3%）と続くが、それ以外の出版社の取扱い楽譜数は少ない。シンフォニーの楽譜や一揃いのパート譜の購入層はオーケストラが中心であると考えられ、そうしたことから交響曲が演奏される機会が多い大都市の大手の出版社以外では取り扱いがなかつたものと考えられる。

なお、Beethoven が 1816 年と 1817 年にシンフォニー第 7 番と第 8 番を出版した際、スコア譜とパート譜に加え、弦管九重奏、弦楽五重奏、ピアノ・トリオ、ピアノ 4 手、ピアノ独奏、2 台ピアノの編曲版を含む 8 種の楽譜がシュタイナー社から同時に出版されている。大規模なオーケストラの作品はパート譜を販売しても買い手が限られることから出版社としても採算が合わず、こうした取り組みが行われたようである。なお、このような販売手法はシンフォニーの出版方法として当時注目されていたと伝えられている²⁶。

出版社ごとに作曲家の内訳をみると、最も印刷楽譜の取り扱いが多い André は Haydn、アーダルベルト・ギロヴェッツ Adalbert Gyrowetz (1763-1850)、Mozart、フランツ・クリストフ・ノイバウアー Franz Christoph Neubauer (1760-1795)、Pleyel、パウル・ヴラニツキー Pavel Vranický (1756-1808) など、幅広い作曲家の楽譜を取り扱っている。次に取り扱いの多い Sieber、Simrock は 7 割以上が Haydn であり、Janet et C. は Haydn、Gyrowetz、Pleyel (J.) に集中している。このようにシンフォニーの楽譜に関しては、今日において有名な出版社であっても多くの作曲家の作品を広範囲に扱うところは少ないようである。

さらに、出版社ごとに地域の内訳をみると、Breitkopf & Härtel は Leipzig 以外に僅かながら Paris でも出版を行っており、Schott は Mainz がメインであるものの Paris でも出版を行っている。

²⁵ 大崎 (2018, 第 1 巻, 第 5 章 108-152)。

²⁶ 大崎 (2018, 第 1 巻, 134-135)。

3.2.3. ピアノ曲

ピアノ曲を出版する出版社の数は114社である。シンフォニーの21社と比較すると5倍以上となっており、取り扱い件数が少ない主要都市以外の出版社も見られる。図表4のピアノ曲の分析結果をみると、最も多くのピアノ曲を出版しているのは Breitkopf & Härtel の219件（ピアノ曲全体の9.4%）であり、次いで André（125件、5.4%）、Simrock（123件、5.4%）、Peters（123件、5.3%）、Haslinger（97件、4.2%）となっている。シンフォニーでは André が1社で3割近い比率であったのに対し、ピアノ曲のカテゴリーでは出版社も増え、各社のシェアも分散している。

出版社ごとに地域の内訳をみると、ほとんどの出版社はひとつの地域で経営を行っている。しかし、Christiani、Schlesinger、Schottの3社は例外であり、Christiani がBerlinとHamburg、Schlesinger がBerlinとParis、ShottがMainzとParisの複数拠点で出版を行っている。

3.2.4. 弦楽四重奏曲

弦楽四重奏曲では、80の出版社名が記載されていた。これはシンフォニーの40社よりは多いが、ピアノ曲の114社よりは少ない。図表4の弦楽四重奏曲の分析結果をみると、最も楽譜出版の多い出版社は Offenbach の André で236件（弦楽四重奏曲全体の11.6%）の出版があった。André はシンフォニーやピアノ曲でも最も多くの楽譜を出版しており、他のジャンルも含めて最も多くの楽譜を取り扱っている。次いで、Pleyel の134件（6.6%）、Sieber の124件（6.1%）、Breitkopf & Härtel の117件（5.7%）である。Sieber や Breitkopf & Härtel はシンフォニーやピアノ曲でも多くの楽譜を出版している出版社である。また、Pleyel は作曲家であり実業家である Pleyel が興した出版社であり、自身もシンフォニー41曲、弦楽四重奏曲70曲を作曲する多作家である。

出版社と作曲家の関係をみると、最も取り扱い件数の多い André は Mozart、Krommer、ピエール・バイヨ Pierre Baillot（1771-1842）、Pleyel、Wranitzky（P.）、Haydn、Gyrowetz、ファニー・メンデルスゾーンーヘンゼル Fanny Mendelssohn-Hensel（1805-1847）など幅広い作曲家の楽譜を取り扱っている。一方、Pleyel は Haydn の楽譜の取り扱いが2割を超えており、出版社によって品揃えや販売戦略が異なる。

出版社と地域の関係では、複数地域で出版を行っている出版社は Mollo、Schlesinger、Schott の3社である。Schott は9割以上が Mainz で、Paris でも出版を行っている。Mollo は46件が Wien での出版であり、Paris で1件だけ出版を行っている。しかし、Schlesinger だけは例外であり Paris と Berlin で約半分ずつの出版となっている。これは父が Berlin で、息子が Paris で楽譜出版社を営んでいたためであり、前述のピアノ曲においても同様に出版件数が両地域に分散している。

図表 4 出版社別出版状況

シンフォニー			ピアノ曲			弦楽四重奏曲		
出版社	件数	構成比	出版社	件数	比率	出版社	件数	構成比
1 André	209	29.4%	1 Breitkopf & Härtel	219	9.4%	1 André	236	11.6%
2 Sieber	110	15.4%	2 André	125	5.4%	2 Pleyel	134	6.6%
3 Janet et C.	84	11.8%	3 Peters	123	5.3%	3 Sieber	124	6.1%
4 Breitkopf & Härtel	56	7.9%	3 Simrock	123	5.3%	4 Breitkopf & Härtel	117	5.7%
5 Simrock	52	7.3%	5 Haslinger	97	4.2%	5 Artaria et C.	110	5.4%
6 Leduc	27	3.8%	6 Pleyel	86	3.7%	5 Janet et C.	110	5.4%
7 Haslinger	19	2.7%	7 Lischke	72	3.1%	7 Haslinger	106	5.2%
7 Peters	19	2.7%	7 Sieber	72	3.1%	8 Simrock	98	4.8%
9 Pleyel	16	2.2%	9 Cranz	70	3.0%	9 Peters	94	4.6%
10 Schott	15	2.1%	9 Schlesinger	70	3.0%	10 Weigl	77	3.8%

3.3. 作曲家別出版状況についての分析結果

3.3.1. 主要な作曲家による出版の概況

Whistling のカタログが発行された時点で、シンフォニー・ピアノ曲・弦楽四重奏曲において最も楽譜の出版を行っていたのは Haydn であり、3つのカテゴリー合計で約 500 件と突出している。次いで、Mozart、Beethoven が約 300 件あるが、両者との差は大きい。これ以外では、Clementi、Steibelt、Cramer (J. B.) と続くがいずれもシンフォニー等に比べて規模の小さいピアノ曲が中心である。

図表 5 は、作曲家別にシンフォニー・ピアノ曲・弦楽四重奏曲のカテゴリー別に出版件数を示したものである。以下ではカテゴリー別に分析結果を確認する。

3.3.2. シンフォニー

シンフォニーに関しては複数の作曲家の曲を集めたコレクションを除くと 107 人の作曲家の楽曲がカタログに掲載されているが、10 件以上の楽譜が出版されている作曲家は限られる。最もシンフォニーの楽譜を出版している作曲家は Haydn で、楽曲数は 250 件（シンフォニー全体の 35.1%）であった。次いで、Pleyel が 59 件(8.3%)、Mozart が 52 件(7.3%)、Gyrowetz が 47 件（6.6%）、Beethoven が 38 件（5.3%）となっている。

Haydn の交響曲は現代では 106 曲とされているが、例えば Oe.91 は No. 1~4 のバラ売りとなっていたり、コレクションがあったりすることからカタログに記載されている楽譜の数が膨れ上がっている。大崎 (1993b, 75-76)によれば、Haydn の存命中と死後しばらくの間に Haydn の名前で楽譜を出版した出版社は偽作も含めると約 300 社あり (Mozart の 100 社の 3 倍)、Haydn の人気は圧倒的であった。また、Beethoven は 38 件中、11 件が編曲譜、12 件がパート譜であり、Beethoven が作曲したシンフォニー9 曲に対して、楽譜の件数が多いのはこのためである。

作曲家別に出版社の内訳をみると、Haydn は多くの出版社が扱っているが Sieber が 73 と最多であり、これ以外では Simrock の 38 件、André の 33 件が多い。大崎 (1993b, 75-76)

は、Haydn の楽譜を 10 点以上出版している出版社は数十社で、特に重要な出版社は 20 程度と述べている。Whistling のカタログは London などカバーしていないが、他のカテゴリーを見ても 10 点以上出版している出版社は 10 社程度となっている。Mozart も比較的多くの出版社が扱っているが、André と Boheme からの出版が多い。一方、Pleyel は Janet et C. から 28 件、André から 25 件と、ほとんどがこの 2 社から出版されている。こうしたことより、シンフォニーの楽譜に関しては複数の出版社から出版できる作曲家はそれほど多くなかったと考えられる。

そうしたなか Beethoven に関しては様々な出版社が取り扱っているが、最も取り扱い件数が多いのは Haslinger で 15 件と 4 割を占める。それ以外では Breitkopf & Härtel、Schott、Simrock がそれぞれ 5 件ずつとなっている。なお、Haslinger はオーストリアの音楽出版社・作曲家であったトビアス・ハスリンガー Tobias Haslinger (1787-1842) により経営された楽譜出版社であり、Beethoven はカノン「おお、トビアス！ハスリンガー殿 (O Tobias! Dominus Haslinger)」(WoO 183) を Haslinger に献呈している。

さらに、作曲家別に地域の内訳をみると、Haydn は Paris で 143 件の出版を行っている他、Bonn で 38 件、Offenbach で 33 件、Wien で 23 件、Leipzig で 9 件、Augsburg で 4 件と広範囲の地域で出版している。Beethoven に関しては、Wien が 15 件と最多であり、Leipzig が 9 件、Bonn が 5 件、Mainz、Paris、Posen²⁷ が各 3 件と、ドイツを中心にオーストリア、フランスなど幅広い地域で出版が行われている。

3.3.3. ピアノ曲

ピアノ曲では、カタログには 359 人の作曲家の楽譜が掲載されており、シンフォニーの 107 人と比較すると 3 倍以上となっている。なお、これとは別に複数の作曲家の曲を集めた曲集が 1 件あった。図表 5 のピアノ曲をみると、最も出版作品数が多い作曲家は Beethoven で 196 件、ピアノ曲全体の 8.4% を占める。今回調査したカタログは Beethoven が亡くなった翌年のものであるが、当時のピアノ曲の分野において Beethoven は圧倒的な存在感があったといえる。また、196 件のなかには 15 件の編曲譜が含まれており、約半分がシンフォニーの編曲、残りがソナタの編曲である。

編曲譜に関しては、1774 年に Breitkopf が Haydn の作品を初めて出版した際に、シンフォニー第 28 番の第 2・3 楽章をクラヴィーア版に編曲したものがある。これ以降、家庭楽器として市民にピアノが普及するとともに、楽譜出版社がこうした需要に対して楽譜の出版を行ったことから、鍵盤楽器用の編曲譜が増加していった。そして、19 世紀になると、ピアノの地位確立とともにピアノ連弾譜やピアノ独奏譜が全盛となった(大崎 1993b, 59, 85)。

Beethoven に次いで出版が多い作曲家は、Clementi が 180 件(ピアノ曲全体の 7.7%)、ダニエル・シュタイベルト Daniel Steibelt (1765-1823) が 143 件 (6.1%)、Cramer が 139 件

²⁷ 現在のポズナン (ポーランド)。

(6.0%)、Mozart が 129 件 (5.5%) である。Clementi は初級の練習曲であるソナチネなどで有名だが、ピアノソナタを約 100 曲作曲している。存命中は Mozart よりも有名であり、Clementi の名声は Haydn や Beethoven を別にすればヨーロッパの音楽界で誰よりも名声が高かったともいわれている (プランティンガ 1993, 7)。さらに、Beethoven も Clementi を賞賛しており、Haydn や Cherubini の楽譜は所有していなかったにも関わらず Clementi のピアノソナタの大半を所有していたという (プランティンガ 1993, 262)。なお、カタログでは Clementi の出版件数は Beethoven に迫る数があるが、それ以外の作曲家に関しては Beethoven、Clementi と大きく差がある。

作曲家別に出版社の内訳をみると、Beethoven の出版社は Simrock と Schott が各 19 件、Pleyel が 16 件、Cappi et C. が 14 件、Peters が 12 件、Haslinger が 11 件となっている。出版件数が多い出版社はドイツ・オーストリア地域の出版社であるが、Paris の出版社からも出版がある。

その他の作曲家に関しては、Clementi は Nadermann、Sieber、André、Breitkopf & Härtel などから出版している。Paris や Leipzig など主要な地域で出版している点は Beethoven と変わらないが、出版社が重複していない。Mozart に関しては、Peters、Simrock、Carli、Lischke、Schott、Hofmeister、Artaria et C. と分散しており、生前活躍していたドイツ・オーストリア地域での出版が多い。

作曲家別に地域の内訳をみると、Beethoven は Paris での出版が 60 件と最も多く、次いで Wien の 41 件、Leipzig の 19 件、Mainz の 17 件となっている。Clementi、Steibelt、Cramer についても Beethoven と同様の傾向があるが、Mozart は Leipzig の比率が高い。これは、Mozart が 1791 年に亡くなっており、音楽の中心が Paris に移る前に出版を行っていたためと考えられる。

3.3.4. 弦楽四重奏曲

弦楽四重奏曲のカテゴリーでは 372 名の作曲家の楽譜がカタログに掲載されている。ピアノ曲では 359 人の作曲家の楽譜が掲載されており、これと同規模である。図表 5 で弦楽四重奏曲についてみると、最も楽譜出版が多い作曲家は Haydn であり、172 件 (弦楽四重奏曲の 8.4%) の出版譜があった。これ以外では、Mozart が 108 件 (5.3%)、Rossini が 89 件 (4.4%)、Pleyel (J.) が 76 件 (3.7%)、フランティシェク・ヴィンツェンツ・クラマーシュ František Vincenc Kramář (1759-1831) が 72 件 (3.5%) と多い。

Haydn は 68 曲の弦楽四重奏曲を作曲しており、もともと作品数が多いこともあり出版件数が突出している。弦楽四重奏曲では 68 曲の作品に対して、172 件と作品数を超える楽譜出版があるが、これは編曲譜やコレクションの形で数曲をまとめた楽譜が出版されているためである。

Mozart に関しては、シンフォニーでは 3 番目、ピアノ曲では 5 番目の出版件数であるが、弦楽四重奏曲では 2 番目となっており、この分野において存在感が際立っている。一方、

Rossini は弦楽四重奏曲で初めて登場した作曲家で、カタログに掲載されているほとんどが編曲譜である。Rossini は 39 曲のオペラを書くなどオペラで有名であり、その人気から多くの編曲譜が弦楽四重奏曲から出版されていたようである。最後に Beethoven についてみると、出版件数は 51 曲と (2.5%) ベルンハルト・ハインリヒ・ロンベルク Bernhard Heinrich Romberg (1767-1841) とともに 6 番目となっている。Beethoven の楽譜が占める比率が、シンフォニーでは 5.3%、ピアノ曲では 8.4% あったことを考えると、楽譜出版数の観点からすると弦楽四重奏曲のジャンルにおける Beethoven の存在感はピアノやシンフォニーに比べて低いようにみえる。

この背景には、Beethoven が 1810 年に弦楽四重奏曲第 11 番（セリオソ）を出版して以降このジャンルから遠ざかっており、後期の弦楽四重奏曲とされる第 12 番が出版されたのは 1825 年と、10 年以上のブランクがあることが影響している可能性がある。さらに、1825 年から 1826 年にかけて第 12 番から第 16 番の 5 曲が出版されているが、Beethoven の後期の弦楽四重奏曲は非常に難しく聴衆に受容されにくいといった理由も考えられる。

例えば、1825 年に出版された弦楽四重奏曲第 12 番の初演のレビューは良くなく、*Leipziger Allgemeine musikalische Zeitung* は、この作品を理解できるのはごく少数の人たちであることから意見は分かると述べている。また、*Wiener Allgemeine Theaterzeitung* は、愛好家だけでなく専門家も含めた聴衆のほとんどが、ほとんど、あるいはまったく理解していなかったと書いている²⁸。同様に弦楽四重奏曲第 13 番に関しても、最後の部分に関しては当初十分な理解が得られず、フーガの代わりに新しいフィナーレで演奏された際には、難易度において全てを上回っていると評された²⁹。

また、土田 (1999, 338) によれば、第 13 番を出版したマティアス・アルタリア社 (Wien にある有名なドメニコ・アルタリア社ではない) は、難しい大フーガ付きの大規模な四重奏曲の出版に際し売れ行きが心配になり、Beethoven にフーガのみ別で出版することを提案している。こうしたことより、Beethoven の後期弦楽四重奏曲は非常に難解であることから、出版社の間では敬遠されていた可能性もある³⁰。印刷楽譜出版の中心であった Paris での出版の比率もこのジャンルでは高くなく、このような状況は楽譜の出版価格にも影響する（高くは売れない）と考えられる。

作曲家ごとに出版社の内訳をみると、Haydn や Mozart は出版社が分散する傾向があるが、Rossini に関しては 89 件中 31 件が Weigl からの出版であり出版社が限定されている。Beethoven は、Schott が 11 件、Simrock が 10 件などドイツの出版社が多い。51 件の出版のうち 10 件を超えるものはその 2 社に限られ、それ以外は分散しており件数も少ない。な

²⁸ 一方で、パフォーマンスの質が悪かったとする説もある (Dorfmueller et al. (2014) など)。

²⁹ Dorfmueller (2014, 855)

³⁰ Beethoven からロンドンでのチェロ・ソナタ (Op. 102) を含む 6 曲の出版を託されたチャールズ・ニート Charles Neate (1784-1877) も、1816 年の書簡の中で出版社が難しすぎて売れないだろうと述べており (大崎 2018, 第 1 部, 140)、Beethoven の作品は難解であることから買い手がつかない、価格が低く抑えられるということはあるようである。

お、前述のように Simrock は Bonn の宮廷楽団で Beethoven の同僚が興した出版社である。弦楽四重奏曲だけでなく、シンフォニーやピアノ曲でも Simrock からの出版は多く、Beethoven が故郷の同僚が興した出版社を頼みにしていたことが伺える。なお、この当時の印刷楽譜の出版の中心地であった Paris や Wien での出版が少ないことがピアノ曲やシンフォニーと異なる。

作曲家ごとに地域の内訳をみると、最も出版件数が多い Haydn は Paris で 84 件の出版があり、これ以外では Wien の 37 件、Leipzig の 21 件が多く、販売地域は分散している。一方、Mozart は Paris が 32 件と最も多く、Wien の 25 件、Offenbach の 22 件となっている。Beethoven についてみると、51 件の出版のうち最も多いのが Wien の 15 件であり、次いで Paris の 13 件、Mainz と Bonn でそれぞれ 10 件となっている。主要な都市はおさえているものの、Paris に関しては Haydn の 84 件や Pleyel の 40 件、Mozart の 32 件とは大きく差があることがわかる。

図表 5 作曲家別の出版状況

シンフォニー			ピアノ曲			弦楽四重奏曲		
作曲家	件数	構成比	作曲家	件数	構成比	作曲家	件数	構成比
1 Haydn (J.)	250	35.1%	1 Beethoven	196	8.4%	1 Haydn (J.)	172	8.4%
2 Pleyel (J.)	59	8.3%	2 Clementi	180	7.7%	2 Mozart	108	5.3%
3 Mozart	52	7.3%	3 Steibelt	143	6.1%	3 Rossini	89	4.4%
4 Gyrowetz	47	6.6%	4 Cramer (J. B.)	139	6.0%	4 Pleyel (J.)	76	3.7%
5 Beethoven	38	5.3%	5 Mozart (W.A.)	129	5.5%	5 Krommer	72	3.5%
6 Wranitzky (P.)	24	3.4%	6 Dussek (J. L.)	107	4.6%	6 Beethoven	51	2.5%
7 Neubauer	14	2.0%	7 Wanhal	79	3.4%	6 Romberg (A.)	51	2.5%
8 Andre (J. A.)	9	1.3%	8 Haydn (J.)	74	3.2%	8 Hänsel	44	2.2%
8 Witt	9	1.3%	9 Hummel	40	1.7%	8 Rode	44	2.2%
10 Küffner	8	1.1%	10 Field	39	1.7%	10 Spohr	43	2.1%

4. 楽譜の出版価格についての分析

4.1. データに収録されている通貨に関する説明

シンフォニー、ピアノ曲、弦楽四重奏曲の3つのカテゴリーでは、図表6に示す5つの通貨が使われている。1つ目は Paris などフランスを中心とした地域で用いられるフラン、2つ目は Wien などオーストリア地域を中心に用いられるフローリン、3つ目は Leipzig などドイツを中心とした地域で用いられるターラー、4つ目は Mailand、Florenz などイタリアを中心とした地域で用いられるリラ、5つ目は Rotterdam、Amsterdam で用いられるオランダのフローリンである。

図表6 カタログに収録されている通貨の基本情報

本位通貨と補助通貨	使用地域	補助通貨の計算
フラン (Fr.) サンチーム(Ct.)	Paris など フランス	1 フラン=100 サンチーム
フローリン(Fl.) クロイツァー (Xr.)	Wien など オーストリア	1 フローリン=60 クロイツァー
ターラー(Thlr.) グロッシェン(Gr.)	Leipzig など ドイツ	1 ターラー=30 グロッシェン
リラ(L.) チェンテージモ(Ct.)	Mailand など イタリア	1 リラ=100 チェンテージミ (複数形)
フローリン (Fl.) ストゥイベル(S)	Amsterdam な どオランダ	1 フローリン=20 ストゥイベル

注) 本位通貨と補助通貨は、上段が本位通貨で下段が補助通貨。()内は、Whistling のカタログにおける表記を示す。

図表7は通貨別出版件数についてまとめたものである。シンフォニーでは、フランが314件(構成比44.1%)と、Parisでの出版が多かったことに比例してフランの比率が最も多い。一方、ピアノ曲は、ターラーが892件(38.2%)と、ターラーでの出版が最も多くなっている。弦楽四重奏曲に関しては、フランが894件(43.8%)と多いが、構成比をみるとシンフォニーと類似している。こうしたことより、シンフォニーや弦楽四重奏曲の受容層は近く、ピアノ曲はそれと異なる需要層を形成していた可能性がある。

ピアノ曲と弦楽四重奏曲は、シンフォニーよりも広い地域の出版社から出版されていることから、フラン、フローリン、ターラーに加えてリラとオランダのフローリンも使われている。しかし、リラとオランダのフローリンを合わせてもピアノ曲ではサンプルの1.7%、弦楽四重奏曲ではサンプルの2.7%しかないため、価格の分析ではフラン、フローリン、ターラーの3通貨について分析を行う。

なお、各(本位)通貨は補助通貨の記載もあるため、図表6の情報をもとに分析では補助通貨は本位貨幣に換算し、カテゴリーごと、作曲家ごとに価格の平均値や中央値を示す。

図表7 通貨別出版件数

シンフォニー			ピアノ曲			弦楽四重奏曲		
通貨	件数	構成比	通貨	件数	比率	通貨	件数	構成比
1 Fr.	314	44.1%	1 Thlr.	892	38.2%	1 Fr.	894	43.8%
2 Fl.	286	40.2%	2 Fr.	807	34.6%	2 Fl.	767	37.6%
3 Thlr.	112	15.7%	3 Fl.	594	25.4%	3 Thlr.	323	15.8%
4 L.	0	0.0%	4 L.	38	1.6%	4 L.	56	2.7%
5 S.	0	0.0%	5 S.	3	0.1%	5 S.	1	0.0%
合計	712	100.0%	合計	2,334	100.0%	合計	2,041	100.0%

4.2. 通貨別の価格の分析結果

4.2.1. シンフォニー

図表8は通貨別の記述統計量である。シンフォニーについて通貨別に価格（中央値）をみると、7.50フラン、2.75フローリン、2.00ターラーとなっている。鈴木（1980）によれば、1820年前後のプロイセンの平均的な官吏の年俸は600～800ターラーであり、18世紀末のプロイセンの教師の年俸は200～400ターラー、大学教授も最高で1200ターラー、平均的にはその半額にも達しない程度である。現代の日本の国家公務員（一般職）の年収は600～700万円前後であり³¹、これからすると当時の1ターラーは現在の1万円程度と考えられる。仮に1ターラー＝1万円程度とすると、平均的なシンフォニーの楽譜の値段は2～3万円といえる。

通貨別に詳細をみると、フランの最小値は3フラン、最大値は60フランであり、最大値となったのはBeethovenの交響曲第9番である。10フランを超える楽譜は30件あるが、このうち6件がBeethoven、4件がHaydn、3件がMozartであった。こうしたことから、Beethovenの楽譜の価格は他の作曲家と比較しても高額であったといえる。この理由には、パート数や小節数といった曲の規模が他の作曲家に比べて大きいこと、特に第9番に関しては合唱付きであることなどが影響していると考えられるが、本稿の分析ではその点に関して考慮できていない。これについては、今後の検討課題としたい。

フローリンでは最小値が1フローリン、最大値が17.50フローリンであり、フランと同様、Beethovenの交響曲第9番の価格が最も高い。10フローリンを超える楽譜は5件あり、全てBeethovenの楽譜である。交響曲第9番以外では、戦争交響曲、交響曲第7番となっており、パート譜も含まれる。戦争交響曲と交響曲第7番およびそのパート譜が10フロー

³¹ 2024年の人事院「国家公務員給与等実態調査」によると、平均給与月額（棒給及び諸手当の合計）は414,801円（平均年齢42.0歳、平均経験年数20.0年）であり、内閣官房内閣人事局の報道資料「令和6年12月期の期末・勤勉手当を国家公務員に支給」及び「令和6年6月期の期末・勤勉手当を国家公務員に支給」によると夏と冬のボーナスの支給月数はそれぞれ2.21月である。これらの情報をもとに計算すると、414,801円×（12か月+2.21か月×2）より、約681万円と計算できる。

リンであるのに対し、交響曲第9番は17フローリン、第9番のパート譜は15フローリンであり、ここからも交響曲第9番は極めて高額で販売されていた特異な例であることがわかる。

ターラーでは最小値が1.00ターラー、最大値が8.00ターラーであり、Kalliwodaの交響曲第7番の価格が最も高額であった。Beethovenの楽譜の価格は4番目に高くなっており、フランやフローリンとは状況が異なる。ターラーでの出版は交響曲第6番を最後としており、交響曲第9番など価格の高いものがないことなどが影響していると考えられる。

4.2.2. ピアノ曲

図表8のピアノ曲をみると、出版譜の価格(中央値)は6.00フラン、1.20フローリン、0.53ターラーであり、全般的にシンフォニーの価格より低い。大崎(1993b, 64-65)によれば、18世紀の楽譜についてパート数、1曲の長さ、何曲セットかといったことでページ数が異なり、それにより価格が変わる³²。シンフォニーはパート数が多く、器楽曲に比べて大規模になることから他のジャンルの楽譜より価格は高くなる一方、ピアノ曲はシンフォニーより小規模なものが多いことから、価格が低くなっていると考えられる。

なお、大崎(1993b, 66)は、シンフォニーは弦楽四重奏曲よりも3~5割高く、クラヴィーア・ソナタは弦楽四重奏曲とほぼ同じかそれより少し安くなると述べているが、本稿の分析結果は概ねこれに沿っている。ただし、大崎(1993b, 66)は、何曲セットで販売するかによって価格が異なることも指摘しているが、この点に関しては本稿では考慮できていない。

また、1ターラー=1万円程度とすると、ターラー通貨エリアでの楽譜の中央値0.53ターラーは5000円程度である。大崎(1993b, 68)によれば、当時の印刷楽譜の購買層は貴族と新しく台頭した市民階級であり、これには頭脳労働に従事する階層や裕福な大商人などが該当する。こうしたことから少し裕福な家庭であれば手が届く価格であったといえる。

通貨別にみると、フランの最小値は1フラン、最大値は12フランである。12フランで販売されていた楽譜は9件あり、内訳はMozartが4件、シャルル・フランソワ・デュモンシヨール Charles-François Dumonchau (1775-1821)が2件、Beethoven、Hameluel³³、Steibeltがそれぞれ1件である。フローリンをみると、最小値が0.07フローリン、最大値が4.00フローリンである。最大値の4フローリンで販売されていた楽譜は4件あり、Beethovenが2件、Clementi、Matauschek、ヨーゼフ・ヴェルフル Joseph Wölfl (1773-1812)が1件である。ターラーでは、最小値が0.13ターラー、最大値が4.00ターラーであり、4ターラーで販売されていたのはPotpourriの1件であった。

4.2.3. 弦楽四重奏曲

³² Lenneberg (1983)によると、出版部数に関しては作曲家の人気やピアノ音楽の市場の影響を受けるが、正確なところは明らかになっていない。

³³ この作曲家について、詳細は不明である。

図表8の弦楽四重奏曲をみると、出版譜の価格（中央値）は7.50フラン、2.50フローリン、1.13ターラーであった。全般的にシンフォニーの価格より低く、ピアノ曲より高い傾向がみられる。弦楽四重奏曲はシンフォニーよりはパートもページ数も少なく、ピアノ曲よりはページ数が多いことからこのような価格差が生じていると考えられる。

通貨別にみると、フランの最小値は1.5フラン、最大値は200フランである。最大値をとる楽譜はHaydnのコレクションで、80の四重奏曲がセットになったものがHaydnの肖像画付きでPleyelから出版されている。同様のHaydnのコレクションはSieberやJanet et C.からも出版されており、Sieberは84曲の四重奏曲がセットになり、Haydnの肖像画がついて160フラン、Janet et C.は56曲の四重奏曲がセットになり、同様にHaydnの肖像画付きで160フランとなっている。いずれの出版社もParisの出版社であり、曲数や曲の組合せを工夫して販売価格を工夫したり、Haydnの肖像画を付録として付けたりするなど、同業他社を意識した販売戦略を展開していたことが伺える。

フローリンに関しては、最小値は0.50フローリン、最大値は84.0フローリンである。最大値を取る楽譜はMozartの四重奏曲のコレクションであり、Artaria et C.から出版されたものである。同様のコレクションはHaydnでもあり、Artaria et C.が45フローリンで出版している。ターラーに関しては、最小値は0.20ターラー、最大値が20ターラー16グロッシェンであり、やはりMozartのコレクションがLeipzigのPetersより出版されている。

図表8 通貨別の出版価格（記述統計量）

シンフォニー							
	最小値	第1四分位	中央値	平均値	第3四分位	最大値	観測値数
フラン	3.00	6.00	7.50	7.86	7.50	60.00	314
フローリン	1.00	2.00	2.75	3.17	3.50	17.50	286
ターラー	0.40	1.27	2.00	2.14	3.00	8.00	112
ピアノ曲							
	最小値	第1四分位	中央値	平均値	第3四分位	最高値	観測値数
フラン	1.00	4.50	6.00	6.12	7.50	12.00	807
フローリン	0.33	0.83	1.20	1.39	1.75	4.00	594
ターラー	0.13	0.40	0.53	0.71	1.00	4.00	892
弦楽四重奏曲							
	最小値	第1四分位	中央値	平均値	第3四分位	最大値	観測値数
フラン	1.50	5.00	7.50	8.04	9.00	200.00	894
フローリン	0.50	1.33	2.50	2.74	3.00	84.00	767
ターラー	0.20	0.53	1.13	1.42	2.00	20.53	323

4.3. Beethoven とそれ以外の作曲家の出版譜の価格の分析

4.3.1. 追加分析の概要

前述の分析では、数ある出版譜のなかでも Beethoven の楽譜は高い値段で販売されていたことが明らかになった。そこで、ここでは Beethoven とそれ以外の作曲家の楽譜の価格差について追加的な分析を行い、Beethoven とそれ以外の作曲家の間で、楽譜の価格に有意な差があるか否かについて分析する。

図表9は Beethoven とそれ以外の作曲家の楽譜の価格について明らかにしたものである。サンプルサイズが十分にないものもあるが、Beethoven の楽譜の価格とそれ以外の作曲家の楽譜の価格の間で差の検定を行った結果もあわせて示す。分析結果としては平均値と中央値について示すが、外れ値があるため以下では中央値を中心に確認する。

4.3.2. シンフォニー

フランについて見た場合、中央値は Beethoven が 15.00、それ以外の作曲家が 7.50 であり、Beethoven の楽譜はその他の作曲家の倍の価格で販売されている。フローリンに関しては、中央値は Beethoven が 6.50 フローリン、その他の作曲家が 2.72 フローリンであり、こちらも 2 倍以上の差がある。なお、フランとフローリンに関しては、中央値は 1%水準で統計的に有意な差があることが確認されている。ターラーに関しては、中央値は Beethoven が 3.00 ターラー、その他の作曲家が 2.00 ターラーであり、両者の差はフラン・フローリンほど大きくないが、中央値の差の検定では 5%水準で有意である。

また、図表 10 の主要作曲家の楽譜の価格を見た場合でも、Beethoven の楽譜は Haydn、Mozart、Pleyel、Gyrowetz に比べて価格が高い傾向がある。例えばフローリンでは、Beethoven が 6.50 フローリンであるのに対し、Haydn が 3.00 フローリン、Mozart が 2.75 フローリン、Pleyel、Gyrowetz が 2.00 フローリンであった。これは、前述の通り交響曲第 9 番など合唱付きの大規模³⁴な楽曲が高額になっていることが一因と考えられる。

4.3.3. ピアノ曲

図表9でピアノ曲についてみると、シンフォニーほどの明確な結果ではないが、フローリンでは、Beethoven の楽譜の価格はそれ以外の作曲家の価格よりも高くなっていた。具体的には、Beethoven の価格が 1.50 フローリン、それ以外の作曲家の価格は 1.00 フローリンとなっており、1%水準で統計的に有意な差が確認されている。一方、フランについてみると、Beethoven が 6.00 フラン、それ以外の作曲家が 6.00 フランと価格差はない。この傾向はターラーでも同様であり、Beethoven が 0.57 ターラーに対して、それ以外の作曲家は 0.53 ターラーである。

³⁴ また、Beethoven の作品は、パート数や小節数などもこれまでの作曲家よりも規模が大きいと考えられる。

シンフォニーほど明確な違いが表れなかった理由としては、ピアノ曲の場合は数曲をセットで販売する楽譜があるなど、必ずしも 1 曲単位で売買されている訳ではないことが考えられる。人気のない曲を寄せ集めた場合もあれば人気のある曲をセットにして高く販売する例もあると考えられ、こうした点は分析では考慮できていない。

図表 10 で主要作曲家の楽譜の出版価格についてみると、フローリンでは Steibelt の 1.20 フローリン、Cramer の 1.15 フローリン、Mozart の 1.00 フローリンに対して、Beethoven フローリンは 1.50 と三者を上回っている。ただし、Clementi のみ例外であり、2.00 フローリンと Beethoven を上回る傾向がある。Clementi が他の作曲家の価格を上回る傾向はフランやターラーでも同様である。Clementi はソナチネなど Beethoven よりも規模が小さいものが多いが、3 曲以上のセットで販売されているものが多いことや、当時とても人気が高かったことなども影響して価格が高くなっていると考えられる。

4.3.4. 弦楽四重奏曲

図表 9 で弦楽四重奏曲についてみると、フローリンでは Beethoven が 2.50 フローリン、それ以外の作曲家も 2.50 フローリンであり、価格に明らかな差はない。それ以外の通貨に関しても、作曲家の楽譜の価格よりも高いという有意な結果は得られなかった。これは、シンフォニーやピアノ曲とは異なる。これは、前述の通り、弦楽四重奏曲のカテゴリーにおいて Beethoven の作品が占める比率が低く、特に後期の弦楽四重奏曲等は難解で一般に受容されにくいものであったこと、創作にブランクがあったことなどから、価格面においても競争優位性がなかったことが理由として考えられる。

図表 10 で主要作曲家の楽譜の出版価格についてみると、Beethoven の楽譜の価格は Haydn、Mozart、Rossini の 9 フランに対して、6 フランと $\frac{2}{3}$ 程度の価格である。ターラーでも Haydn、Mozart、Pleyel、Krommer を下回る 1.27 ターラーとなっている。フローリンでは 2.5 フローリンと Haydn と同じであるが、Krommer、Mozart、Pleyel よりも低くなっており、こうした点からも弦楽四重奏曲において Beethoven の楽譜に価格優位性がないことがわかる。

図表9 Beethoven と Beethoven 以外の出版価格の分析結果

シンフォニー									
	フラン			フローリン			ターラー		
	中央値	平均値	観測値数	中央値	平均値	観測値数	中央値	平均値	観測値数
全体	7.50	7.42	314	2.75	3.17	286	2.00	2.30	112
Beethoven	15.00	24.62	8	6.50	6.88	21	3.00	2.80	9
Beethoven以外	7.50	7.42	306	2.72	2.88	265	2.00	2.09	103
統計量 (t値/z値)	4.58 ***	2.20 *	-	5.17 ***	4.38 ***	-	2.13 **	1.87 *	-
ピアノ曲									
	フラン			フローリン			ターラー		
	中央値	平均値	観測値数	中央値	平均値	観測値数	中央値	平均値	観測値数
全体	6.00	6.12	807	1.20	1.39	594	0.53	0.71	892
Beethoven	6.00	5.67	85	1.50	1.68	67	0.57	0.67	44
Beethoven以外	6.00	6.15	722	1.00	1.36	527	0.53	0.71	848
統計量 (t値/z値)	1.42	-1.32	-	4.23 ***	3.21 ***	-	1.00	-0.76	-
弦楽四重奏曲									
	フラン			フローリン			ターラー		
	中央値	平均値	観測値数	中央値	平均値	観測値数	中央値	平均値	観測値数
全体	7.50	8.04	894	2.50	2.74	767	1.13	1.42	323
Beethoven	6.00	7.26	23	2.50	3.03	27	1.27	1.27	1
Beethoven以外	7.50	8.06	871	2.50	2.73	740	1.13	1.42	322
統計量 (t値/z値)	0.35	-1.00	-	1.97 **	0.91	-	0.23	-	-

注) 統計量は Beethoven と Beethoven 以外の間で差の検定を行った結果であり、平均値は t 検定、中央値はマンホイットニーの U 検定の結果を示す。***は 1%水準、**は 5%水準、*は 10%水準で有意であることを示す。

図表 10 主要作曲家の楽譜の平均価格

シンフォニー											
フラン				フローリン				ターラー			
	中央値	平均値	観測値数		中央値	平均値	観測値数		中央値	平均値	観測値数
Haydn (J.)	6.00	6.71	181	Haydn (J.)	3.00	2.91	60	Haydn (J.)	1.00	1.04	3
Pleyel (J.)	7.50	7.36	32	Pleyel (J.)	2.00	2.21	27	Pleyel (J.)	-	-	0
Mozart	7.50	9.96	14	Mozart	2.75	2.76	22	Mozart	2.00	2.00	1
Gyrowetz	7.50	7.24	23	Gyrowetz	2.00	2.07	24	Gyrowetz	-	-	0
Beethoven	15.00	24.63	8	Beethoven	6.50	6.88	21	Beethoven	3.00	2.80	9

ピアノ曲											
フラン				フローリン				ターラー			
	中央値	平均値	観測値数		中央値	平均値	観測値数		中央値	平均値	観測値数
Beethoven	6.00	5.82	85	Beethoven	1.50	1.68	67	Beethoven	0.57	0.67	44
Clementi	7.50	7.18	91	Clementi	2.00	1.97	53	Clementi	1.00	1.34	32
Steibelt	6.00	6.46	51	Steibelt	1.20	1.27	39	Steibelt	0.40	0.48	52
Cramer (J. B.)	6.00	6.16	62	Cramer (J. B.)	1.15	1.31	32	Cramer (J. B.)	0.53	0.76	44
Mozart (W.A.)	5.00	6.12	41	Mozart (W.A.)	1.00	1.46	41	Mozart (W.A.)	0.60	0.76	47

弦楽四重奏曲											
フラン				フローリン				ターラー			
	中央値	平均値	観測値数		中央値	平均値	観測値数		中央値	平均値	観測値数
Haydn (J.)	9.00	14.52	90	Haydn (J.)	2.50	3.88	60	Haydn (J.)	2.00	2.62	22
Mozart (W.A.)	9.00	14.17	44	Mozart (W.A.)	2.75	4.85	50	Mozart (W.A.)	2.00	3.17	14
Rossini	9.00	10.30	29	Rossini	2.00	2.73	45	Rossini	-	-	0
Pleyel (J.)	7.50	7.65	41	Pleyel (J.)	2.67	3.02	34	Pleyel (J.)	3.00	3.00	1
Krommer	7.50	7.79	29	Krommer	3.00	3.61	40	Krommer	2.40	2.40	2
Beethoven	6.00	7.26	23	Beethoven	2.50	3.03	27	Beethoven	1.27	1.27	1

5. おわりに

本稿は、Whistling による 19 世紀の印刷楽譜のカタログを俎上に載せ、シンフォニーとピアノ曲、弦楽四重奏曲のカテゴリーの分析を通して、19 世紀前半の楽譜出版について主要な作曲家や出版社の状況、出版地域や出版価格について明らかにした。さらに、1827 年に死去した Beethoven について、楽譜出版の点からその位置づけを検討した。

分析の結果、以下が明らかになった。シンフォニーのジャンルにおいて、Beethoven の楽譜の価格は他の作曲家よりも高額で販売されていたことがわかった。これはシンフォニー第 9 番のような合唱付きの大規模な曲が含まれていたこと、Beethoven がこのジャンルで編曲譜も含めて出版件数が多く一定の影響を持っていたことなどが背景にあると考えられる。ピアノ曲のジャンルにおいても Beethoven の価格プレミアムは一定程度認められたが、シンフォニーほどは顕著ではなかった。これには、ピアノ曲では複数曲をセットにして販売したりする傾向があり、こうした要因が影響している可能性もある。

一方、弦楽四重奏曲のカテゴリーにおいては Beethoven の楽譜の価格プレミアムは確認されなかった。これは、このカテゴリーでは Rossini の編曲譜が多く出版されるなど競合も多く、それに対し Beethoven の出版が多くなかったこと、Beethoven が弦楽四重奏曲の創作において 10 年以上のブランクがあったこと、後期の弦楽四重奏曲は長大かつ難解であり出版社も出版を敬遠したり、販売価格を高く設定することができなかつたりしたことが要因として考えられる。

さらに、19 世紀の楽譜出版の状況について、以下の 4 点が明らかになった。第 1 に、編曲譜等も含めると当時最も楽譜出版の多かった作曲家は、ピアノ曲が Beethoven、シンフォニーと弦楽四重奏曲が Haydn であった。Haydn は 1809 年に死去しているが、それから 20 年ほど経った 1828 年でも多くの楽譜が出版されており、他の作曲家を凌ぐ圧倒的な人気があったことが本分析の結果からも確認できた。

第 2 に、出版地域に関してはどのジャンルでも Paris の出版が最も多く、次いで Wien や Leipzig などでの出版が多くなっていた。ウェーバー (1983) によれば、演奏会が爆発的に増加した 1815~1845 年頃に中心となっていた地域は Paris、Wien、London であったという。こうした音楽業界を取り巻く環境は、楽譜出版とも強く結びつき、印刷楽譜の市場を形成していたものと考えられる。

第 3 に、出版社の面からみると、シンフォニーは Offenbach (ドイツ) の André、ピアノ曲は Leipzig (ドイツ) の Breitkopf & Härtel、弦楽四重奏曲は Offenbach (ドイツ) の André の出版件数が多く、ドイツの出版社が上位を占めていた。しかし、出版社の数でみるとどのジャンルでも Paris が圧倒的に多かった。Paris では小規模な出版社が林立しており競争が激しいのに対して、ドイツ地域では大手出版社が多くのシェアを占める寡占に近い状況にあるという対照的な状況になっていることも明らかになった。

第 4 に、出版価格については、ターラーについてみた場合、シンフォニーが 2.00 ターラー、ピアノ曲が 0.53 ターラー、弦楽四重奏曲が 1.13 ターラーと、シンフォニーの値段が最

も高く、次いで弦楽四重奏曲、ピアノ曲となっていた。1ターラー=1万円程度とすると、平均的なシンフォニーの楽譜の値段は2万円程度、弦楽四重奏曲の楽譜の値段が1万円強、ピアノ曲が5,000円強であり、当時の裕福な市民層であれば手の届く価格であったといえる。

さて、本研究の意義としては、以下3点を挙げる。1点目として、19世紀の楽譜の出版価格について分析を行った点を挙げる。分析では、実際に販売されていた楽譜の情報から当時の楽譜の価格を統計的に示すことで、音楽学ではこれまで行われてこなかった中央値や平均値などの客観的なデータを提示することができた。2点目は、楽譜出版の状況を俯瞰した上で、Beethovenの位置づけを明らかにした点である。3点目に、Whistlingのカatalogを調査することにより、1828年時点の楽譜出版の状況（具体的には、出版地域や出版社、作曲家の状況）について示した点を挙げる。印刷楽譜のカatalogは重要な資料であると認識されつつも、その情報量が膨大であることから、（個々の作曲家やその楽譜の価格は参照されることはあっても）全体像を明らかにするような分析はこれまであまり行われてこなかった。本稿ではOCRの技術を用い大量の情報をデータ化することで、従来音楽学ではあまり行われてこなかった分析を試みが、こうした分析は他の印刷楽譜のカatalog等へも応用できるものと考えている。

なお、本稿の残された課題としては以下2点を挙げる。第1に、カatalogでは作曲家が出版した楽譜と編曲譜が混在しており、シンフォニーでは総譜とパート譜が混在している。さらに、ピアノ曲では数曲セットで販売されているものもあったが、分析ではこうした点を考慮できておらず、価格の分析では単にWhistlingのカatalogに記載された楽譜1つ当たりの価格を示したにすぎない。大崎（1993b, 64-65）は、18世紀の楽譜についてパート数、1曲の長さ、何曲セットかにより価格が変わると述べているが、それ以外にもジャンルや地域、出版社、作曲家の人気の度合いなども価格に影響している可能性がある。こうした点についても考慮できれば、より精緻な分析結果を得ることができると考える。第2に、今回の分析では通貨については換算することなく分析を行ったが、通貨を換算することができれば更なる分析が可能となる。こうした点に関しては、今後、可能な限り対応していきたい。

末筆になったが、本論文の執筆にあたり、安田和信先生、沼野雄司先生、佐藤康太先生、西原稔先生（桐朋学園大学）、坂上学先生（法政大学）から大変貴重なアドバイスをいただいた。ここに記し、心から感謝申し上げます。

引用文献

- ウェーバー, ウィリアム 1983 『音楽と中産階級』 城戸朋子 (訳) 東京: 法政大学出版局
- 大崎滋生 1993a 『音楽演奏の社会史ーよみがえる過去の音楽』 東京: 東京書籍
- 大崎滋生 1993b 『楽譜の文化史』 東京: 音楽之友社
- 大崎滋生 2018 『ベートーヴェン像再構築』 東京: 春秋社
- 人事院 2024 「国家公務員給与等実態調査 令和6年 調査結果」
- 鈴木潔 1980 「ターラー, グルデン, グロッシェンなど ードイツ・ロマン派研究資料」『同志社商学』 377-395
- 内閣官房内閣人事局 2024a 「令和6年6月期の期末・勤勉手当を国家公務員に支給」
- 内閣官房内閣人事局 2024b 「令和6年12月期の期末・勤勉手当を国家公務員に支給」
- 土田英三郎 1999 「弦楽四重奏曲 変ロ短調 Op. 130, 133 (第13番)」 『ベートーヴェン事典』 平野昭, 土田英三郎, 西原稔 (編著), 337-343 東京: 東京書籍
- プランティンガ・レオン 1993 『クレメンティ 生涯と音楽』 藤江効子 (訳) 東京: 音楽の友社
- Beer, Axel. 2007. "Whistling, Carl Friedrich" In *MGG2*. Personenteil 17, 848.
- Dorfmueller, Kurt, Gertsch Norbert, and Ronge Julia. 2014. *Ludwig van Beethoven : thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis Band 1*. München, G. Henle.
- Duckles, Vincent. 1967. "Music Literature, Music, and Sound Recordings." *Library Trends* 15 (3) Bibliography: Current State and Future Trends, Part 1. Edited by Robert B. Downs and Frances B. Jenkins.
- Elvers, Rudolf and Hopkinson, Cecil. 1972. "A Survey of the Music Catalogues of Whistling and Hofmeister." *Fontes Artis Musicae* 19 (1/2): 1-7.
- Krohn, C. Ernst. 1919. "The Bibliography of Music." *The Musical Quarterly* 5 (2): 231-254.
- Krummel W. Donald 2001. "Whistling (German family of publishers)" *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, Edited by Stanley Sadie, Second Edition. 27, 337.
- Lenneberg, Hans. 1983. "Music Publishing and Dissemination in the Early Nineteenth Century. Some Vignettes." *The Journal of Musicology* 2 (2): 174-183.
- Whistling, Carl Friedrich 1828. "Handbuch der musikalischen Literatur oder allgemeines systematisch geordnetes Verzeichniss gedruckter Musikalien, auch musikalischer Schriften und Abbildungen mit Anzeige der Verleger und Preise, herausgegeben von C. F. Whistling."